

天地

ネットワーク テーブル 新春（440号）

発行：2017・1・18：天地シニアネットワーク

T E N T I ・ T O D A Y 賀春			1
会員の広場」<整理する、捨てること><動画> <図書・揺れ動くまな板の上の鯉>			2
連載作品			4
隨 想	天のわざ、地のほまれ—地球を測れ、宇宙をはかれ— 17. 万有引力発見から天体力学へ	伊那 閑歩	4
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語（15） <大原の山里4・宝仙院>	大竹 漠洲	7
隨 想	般若心経読本（1）	藤田 克明	9
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		1 3
事務局			1 4

T E N T I T O D A Y

賀 春

20日は、いよいよトランプ米新大統領の誕生ですが、どのように登場し、どのように収まるか、世界が固唾をのんで見守っているのではないでしょか。歴史を搖るがす一年になりそうです。

毎年、年賀状に書かれた皆様からのコメントを新春号でピックアップしてのせていましたが、数が減りコメントも少なくなっていましたので、今年は取りやめました。

本年もよろしくお願ひ申し上げます。

最近のお正月の楽しみは、テレビでのスポーツ観戦です。箱根駅伝、大学、高校のラグビーなど、シナリオのない、ガチンコ勝負は、魅力たっぷりです。大相撲初場所、最近は若手が力をつけて、上位力士に正面からぶつかっていく相撲が増え、いっぺんに面白くなっています。

国会は、<テロ防止法案>にからんで共謀罪なる怪しげな法律が登場、と報じられています。スポーツ放送が終わるとテレビを直ぐ消してしまうのも拙いと思いますが、気分が落ち込みます。

8日、9日の連休辺りから、咳と熱が出て、肺炎と診断されてしまいました。1週間の安静を言い渡されましたので、発信が少し遅れました。あしからず

ご了承ください。

会員の広場

(2016・12・27受信)

今年もネットワークテーブルをお送りいただき有難うございました。一人で何役もこなすのは知力、体力ともに大変でしょうが、貴兄の使命感にエールを送ります。

今年は神奈川の仲間の中から、お面をつけて能を舞うという生涯に一度有るか無いかの大仕事を成就させた人が二人、水彩画や陶芸の個展を開いた人も夫々出ました。小生も刺激を受けて四年がかりの帆船模型制作を何とか完成させましたが作り始めて六隻目になり、体力、根気ともそろそろ限界です。

傘寿を迎えたのを機に整理する、捨てることを始めました。六月に車検が来た車を先ず廃車、それに合わせて本、レコード・CD、ビデオテープ、食器・花瓶類など使わなくなった一部の処分を始め「老いるとは、端的に言えば、潔く捨てていく過程である」を実感しています。捨てるばかりの人生では少々味気ない気もありますので、取り敢えず地元シニアクラブの世話人と仲間が増え情報源の多様化にも役立っているトレーニングジム通いは続け、神奈川の仲間と約束した「東京オリンピックを見学し、はやぶさ二号と再会しよう」を果たしたいと思っています。

年末、真珠湾での阿部首相の不戦の決意、融和・和解の力の訴えを素直に力強く聞きました。来年、トランプ大統領が就任した後の国際情勢、経済情勢が大方の予想を覆して良い方向に向き、安倍首相の訴えが国際社会に少しでも浸透すればと期待しています。それではよいお年をお迎えください。

(塚口純正)

謹賀新年

yaku5151 (小泉)

2017のお正月は如何お過ごしになりましたか。

後数日にはいよいよ世界中が注目する、トランプ大統領が誕生します。

トヨタにまで注文を付けるとは、どうなる事やらですね！

日中・日韓・日露と問題山積なうえに、またまた最大な難関が？！

そのようなご時世なので、2日に私は明るく楽しい所へ行って来ました。。

世界的な照明デザイナー「石井幹子」監修のイルミネーション

今までになく素晴らしい「よみうりランド」で遊んできました。

暖かいお部屋で冬空に煌く「宝石イルミネーション」をお楽しみください。

- 1) <https://youtu.be/Epxqt8dQVw0>
- 2) <https://youtu.be/NZE-42NA8rM>
- 3) https://youtu.be/quAtSvrwc_o
- 4) <https://youtu.be/tfVXUg-b8FI>

明けまして おめでとうございます

お健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。
さて 私は暮れも押し迫った昨年暮れ、新たに本を出版しました。

3年前元気に動き回っていた私の肝臓に、突然直径 7.5 cm の巨大な腫瘍が見つかりました。毎月定期検査を受けている身で、何でこんなに大きくなるまでわからなかったのかと思いながら、肝臓の 60%強を切除しました。出血多量で術後の経過は必ずしも良くなく、一時は際どいところまで追い込まれましたが、幸い渡りかけていた三途の川から、途中で U ターンし、現在経過観察中ながら 2 度目のお正月を自宅で迎えることができました。大病して自宅のありがた味をつくづく感じます。

闘病中 気持ちを紛らわせるために断片的に書いたリアルなエッセーを一冊にまとめたらと、周囲から勧められていきましたが、歴史や植物物語などではなく、プライベートな内容なので躊躇していました。ところがこうして元気になれたのも、入院中多くの方々の励ましおかげだと思い、出版に踏み切りました。

ご案内させていただきます。

「揺れ動くまな板の上の鯉」

(東京図書出版 : 定価¥1200、消費税別)



紀伊国屋などの主な書店で暮れに全国一斉に発売されました。

プライバシーの開示でちょっと恥ずかしいなという気持ちと、同病の方頑張ってという気持ちが交錯します。ユニーク？闘病記、一度手に取ってみてください。すでに多くの方から反応をいただき、「がん」がとても身近なテーマになっていることを思い知らされています。

札幌は暮れも押し迫って 50 年ぶりの記録的なドカ雪となり、文字通りのホワイ
トクリスマスから白一色の新年を迎えました。

今年も皆様にとって幸多き年でありますよう、心からお祈りします。

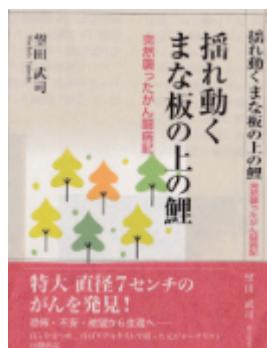
インフルエンザと、雪の多い地方にお住まいの方は滑ってスッテンコロリンにご注意ください。今冬すでに経験し、救急車の世話になってしましました。(^-^;

望田武司

t21xmochida@feel.ocn.ne.jp

電話・Fax : 011-623-5171

入手できない場合、私の方からお送りします。お気軽に連絡ください。(送料・消費税無料)



連載作品

天のわざ、地のほまれ —地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 関歩

17. 万有引力発見から天体力学へ

ニュートンにより2つの物体間に働く万有引力がどういうものであるかわかった。キャベンディッシュにより、その力の強さもわかった。ケプラーによる惑星の運動にかんする3法則も見事に解明された。こうして、太陽の周りを回る惑星の位置もすべて厳密に予知できるものと思われた。

しかしながら、自然はそう単純ではなかった。太陽と地球だけのシステムについては、問題はない。ニュートン力学によって地球の動きは完璧に説明できる。ところが、そこに月が加わると途端に難しくなったのだ。つまり、太陽-地球-月という3つの天体の動き（3体問題）は、3つの微分方程式から成る連立方程式によって表現されるのであるが、この3体問題の厳密解がないのである。現代に至っても、しかたなくコンピュータによって近似的な解を求めて各天体の動きを部分的に捉え、それらをつなげて軌道を決定していくほかないのである。宇宙探査機ハヤブサ（2003年にJAXAによって打ち上げられ、小惑星イトカワに到着、微小サンプルを採取、数々のトラブルを克服して2010年地球に帰還した）も、こうした膨大な近似計算を重ねることによって決定された軌道に沿って宇宙空間を航行したのである。

3体問題には、例外的な厳密解がいくつかあって、それらを発見したのがサルディニア王国（イタリア）トリノ生まれの数学学者ジョセフ＝ルイ・ラグランジュ（1739-1813）であった。かれは成人してから、フランスに住みつき、数学はもとよりニュートン力学を深く研究し解析的な方法（微分・積分）を駆使して「解析力学」を完成したのである。すべての物理研究者は、この18世紀の大数学者ラグランジュからの恩恵に少なからず浴しているのだ。

太陽と木星からなるシステムを考えよう。ここにもうひとつ天体をつけ加えるとすれば、どこに持ってくれればよいだろうか。木星や太陽にあまりに近づきすぎれば、たいへんなことになる。太陽に近づきすぎて蒸発してしまうか太陽に吸いこまれる彗星が、年間かなりの数にのぼることが最近わかつってきた。

2013年11月に現れたアイソン彗星は、大彗星に成長すると期待されたが、太陽から110万kmしか離れていない灼熱の空間を通過したため、ひとたまりもなく蒸発してしまったのであった。また、1994年3月、シューメーカー・レヴィー第9彗星は木星に近づきすぎて破壊され9個の破片になって木星本体に次々にすいこまれてしまったのだ。最近では（2016年末）映画「君の名は」の中に、ティアマト彗星が地球に近づき2つに崩壊して地上に落下する美しいシーンが見られた（映画だから気楽だ！）。

太陽と木星の引力を受けて天体が安定して運行し続けることが出来る場

所が 5 か所ある(ラグランジュ・ポイントとよばれる場所)ことをラグランジュは発見したのである。このうちの 3 か所は、太陽と木星を結ぶ直線上にあり、重力的に若干不安定なので軌道をはずれることもあるが、残る 2 か所 L_4 , L_5 , は、太陽-木星-天体が正三角形をなすような場所で、木星の軌道上にあり重力的に安定で、あたかも落ち葉の吹きだまりのように多くの天体がここに(捕われて)集まっているのである。木星の場合、木星の進行する軌道の前後、直線距離で 7 億 8 千万キロメートル(太陽-木星間と同じ距離)の位置にあり、そこに多くの(名前がつけられているだけでも 100 個ほど)小惑星が集合していることがわかっている。

これら 2 つのラグランジュ・ポイントに集結する小惑星群はトロヤ群とよばれ、前方のトロヤ群はグリーク・キャンプ、後方の群はトロヤ・キャンプとよばれている。これらの小惑星は、木星の公転軌道上を木星と同じスピード(約 10 km/秒)で走りつづけている。天文学者はそれぞれに属する小惑星にホメロスの『イリアス』と『オデュッセイア』の登場人物の名をついている。たとえば、884 プリアモス(トロイの王)、1172 アイネイアス(トロイの英雄、トロイ陥落後おちのびてイタリアを建国、ウェルギリウスの長編『アイネイス』の主人公)、1173 アンキセス(アイネイアスの父親)、3317 パリス(絶世の美女ヘレネを誘惑しあけ落ちしたトロイの王子。それがトロイ戦争をひきおこした。王子ヘクトルの弟)などはトロヤ・キャンプに布陣している。名前の前の数字は小惑星番号で、1801 年に 1 セレス(ギリシャ語でデメテル、豊穣の女神)がイタリア人天文学者 G. ピアツィ(1746-1826)によって発見されて以来、順番に番号をつけている。

588 アキレス(ギリシャ軍の英雄、アキレス腱で有名)、659 ネストル(ピュロスの老王)、911 アガメムノン(ミュケナイ王、ギリシャ軍総司令官。戦勝を願って娘イフィゲネイアを生贊として神にささげる。トロイの王女カッサンドラを愛人として連れ帰り、妻クリュタイムネストラとその情夫アイギストスによって謀殺される。)、1143 オデュッセウス(『オデュッセイア』の主人公、木馬作戦を立案しトロイを陥落せしめたギリシャのイタケ王。パイエケスの王女ナウシカに助けられ、ふたりの女神カリプソ、キルケなどといろいろあって(女神の深情け?)故郷イタケ島に帰還するまで 10 年かかる。帰還後の決闘によってゴロツキ共を成敗する)、1647 メネラオス(スパルタ王。アガメムノンの実弟、トロイの王子パリスを招待し妻ヘレネを奪われる。トロイ戦争に勝利してヘレネを奪還する)などはもちろんグリーク・キャンプにいるが、ネーミングの際に少し混乱があつて、624 ヘクトル(トロイの王子、アキレスとの決戦に敗れる)はギリシャのキャンプに滞在しており、アキレスの盟友 617 パトロクロスはトロイの陣中に囚われているのだ。ほかにも両陣営のスパイではないかと思われる人物の名がそれぞれのキャンプにみられる。最近は観測がすすみ、微小な小惑星を家来としてつれている英雄たちも多くみつかっているという。ナウシカも侍女をつれているらしい。

ラグランジュはトロヤ群小惑星の存在を予言していたと言われているが、実際にそのひとつ目が発見されたのは、1906 年のことであった。それから続々と発見がつづき、微小なものもあわせれば、トロヤ群だけでも数万個あると考えられている。本来、火星と木星の軌道の間に小惑星帯があり、軌道

が確定しているものだけでもその数は現在 10 万個を超えている。

土星については、第 4 衛星ディオーネ（美の女神アフロディーの母親）と第 12 衛星ヘレネ（美女はこんなところに囚われていた！）が土星本体と正三角形の位置にあり、また、土星-第 3 衛星テティス（アキレスの母親）-第 14 衛星カリプソ（海の女神）が正三角形を保ったまま運行している。さらに土星-第 3 衛星テティス-第 13 衛星テレスト（水の精）も正三角形の位置にあり、したがって、土星-カリプソ-テティス-テレストは平行四辺形の形を永久に保ったまま土星を扇の要として回転をつづけるのである。

それでは地球についてはどうであろうか。地球のラグランジュ・ポイントにはなにかモヤッとしたものが観測されているというが、今はまだよくわからないのではないか。冬の夜空にはオリオン座のベテルギウス、オオイヌ座のシリウス、コイヌ座のプロキオンなど明るい星たちが、正三角形を作つて輝いている（冬の大三角形）のが見られるが、これらは見かけだけのこと、ラグランジュ・ポイントとはまったく何の関係もない。

ラグランジュは、フランスの宮廷から請われてマリー・アントワネットの家庭教師になっていたと言われている。多分、王子や王女が生まれる前の比較的暇な 7 年間のことであったと思われるが、真偽のほどは明らかではない。ラグランジュは 50 歳を迎え、研究の集大成をはかろうという時にフランス革命が勃発、教え子マリー・アントワネット（1755-1793）も、親友で「物質の質量保存の法則」を発見した著名な化学者アントワーヌ・ローラン・ラヴォアジエ（1743-1794）も（徵税請負人であったという“前科”をとがめられて）断頭台において処刑されたのである。ラグランジュは、革命裁判所で尋問ぐらい受けたかもしれない。しかし、別段咎められることなく以後、かれは身を切られるような悲しみを抱えながら、激動の時代を生きのびたのであった。

それにしても万有引力は、不思議な力である。磁石は N 極と S 極があつて、N と S は引き合うが、N と N また S と S は反撥しあう。電荷についても、プラスとマイナスは極めて強い力で引き合うが、プラス同士、マイナス同士は反撥することをひとはよく知っている。しかしながら、万有引力は、その名のとおり、すべての物質のあいだに引力だけが作用すると主張している。

しかも各物質の性質にはよらず、ただ物質の重さだけに依存するのだ。後の回で述べるが、万有引力は力学の法則と密接に関係しており、斥力があるとすればたいへん困る。このような意味で、現時点では、重力の作用のしかたはよくわかったものの、その本質はなにか（なぜ万有引力があるのか）全然わかっていないのだ。今後、重力波の研究が進めば、重力そのものの正体があつかれるかもしれないと思われる。

（つづく）

＜そうだ京へ行こう・古刹の花物語＞（15）

大竹 漠州

若狭街道の古刹

大原の里4・宝泉院

宝泉院は大原寺（勝林院）の住職の坊として、平安末期の1012年（長和2年）に創建されています。「声明」と「額縁庭園」として有名な坊です。建物は室町時代に再建されています。

余談です。「勝林院」で「声明」の日本に伝えられた経緯について書きましたが、「声明」をもう少し詳しく説明しておきます。正確には「声明」は「聲明」と書きます。仏典に節を付けた仏教音楽の一つで、無音階の読経とは全く異なります。仏教儀礼に用いられて、日本では宗派によって、梵歌、梵匿、魚山とも言います。

「声明」は五台山を巡礼した円仁によって、日本に伝えられましたが、奈良時代に催された大仏開眼供養には、半島、中国、天竺（インド）からも、僧侶が渡海して参列しており、天竺の僧侶により「インド声明」が奉納された記録が残っています。声明は基本的に口伝えであって、西洋音楽の楽譜に相当するものはありません。そのため伝授は困難を極めました。後世になって、楽譜に当たる墨譜、博士が考案されましたが、声明を正式に習得するためには、口伝が不可欠で、師から弟子への面授に寄らなければなりませんでした。

幾たびかの戦乱と明治期の廃仏棄釈で、寺院が荒廃し僧侶も離散して、声明は、一部の寺院で細々と伝えられてきましたが、大半は廃れてしまいました。「聲明」が伝えられてきた寺院は、大原の勝林院と宝泉院の二院だけでした。

宝泉院の「額縁庭園」は客殿と西方にある庭園です。別名「盤園」とも呼ばれ、“立ち去りがたい”的意味があります。庭園には樹齢を重ねて迫力のある「五葉の松」が、中央に枝を広げて堂々とした姿で迎えてくれます。「五葉の松」は、二条城に狩野探幽一派が描いている「松柏図」に劣らない程の生命力が漲っています。背景を成している竹林の間から、昔と変わらない鄙びた大原の里が望めます。又、部屋の中から格子越しに鑑賞する「鶴亀庭園」は、江戸中期に作庭されたと伝えられています。

京都の庭園には「鶴亀」と称する庭園が京都の古刹には幾つか、松を模ったもの、石や岩で模ったもの、或いは組み合わせたもの等々を見る事ができます。「宝泉院」の鶴亀は、また違った趣向です。池の形を鶴に、筑山を亀に見立てています。山茶花の古木を蓬萊山として見る庭園に仕立てています。側に沙羅双樹が植えられています。

余談です。蓬萊山の初出は司馬遷の『史記』です。蓬萊山は三神山の一つで、中国伝説の山です。東海にある海にあって、仙人が住み不老不死の地と信じられた靈山です。秦の始皇帝時代に徐福伝説が残っています。徐福は日本を蓬萊山と考えていたようです。日本列島にも徐福が上陸したと伝えられ

る地域が言い伝えられています。日本人が考えた靈山は富士山・熊野・熱田でした。

「宝泉院」にも関ヶ原の合戦前夜、徳川家の忠臣・鳥居元忠以下340名が、伏見城で攻め入る豊臣軍を迎撃ち、討ち死を弔うために、流された血に染まつた廊下板を「血天井」として残されています。「血天井」のある寺院は五ヶ寺ありますが、何れも徳川家と深い縁のある寺です。

京都へ学生の頃から長年に亘って通っていましたが、「宝泉院」は初めての参拝です。この寺が「額縁庭園」である知識は持っていました。しかも驚くほどの迫力のある庭園です。「額縁庭園」と呼ばれる寺院は、円通寺を代表として、円光寺、詩仙堂が知られていますが、これらの寺に勝るとも劣らない「額縁庭園」が見られる寺が宝泉院です。恥ずかしながら旅人もその一人ですが、わざわざ三千院まで訪れて「宝仙院」まで訪れてこない人が多いのは残念なことです。

新しい庭「宝楽園」が作庭されています。矢鱈長い庭園様式名で、「仏神岩組雲海流水回遊花園」です。説明書には“地球太古の創生に遡り、その原初の海を創造した庭園”とのことです。白砂と石組と花木を組み合わせた庭園ですが、説明書を読むまでは「大海原」も「大宇宙」も感じられないほど、せせこましい庭です。「大海原」「大宇宙」を感じさせる枯山水は龍安寺の「石庭」しかありません。

また時間に余裕があれば「呂川」「律川」上流にある「音無の滝」にも登ることをお勧めします。特に夏は上ってきた甲斐があります。滝の真下まで池、飛沫が全身にかかり、涼しい事この上もありません。

「宝泉院」を後にして、来た道を戻っています。谷川近くの「大原御陵」に立ち寄りました。怨霊好きな旅人にとって、大変な怨霊の大物が祀られていた事を知りました。

鎌倉時代の政変から悲劇は始まります。北条氏一族による源氏の暗殺が行われ、1219年（承久1年）の公暎による実朝暗殺で源氏の血統は途絶えて、北条氏の傀儡が始まるに端を発します。

この期に朝権の復活を目論んだ人物が「大原御陵」主人公の後鳥羽上皇です。1221年（承久3年）に北条討伐の宣旨を下しましたが、無残にも敗れて上皇は佐渡島に、謀議に加担した順徳天皇は隱岐島に流罪されました。簡単な「承久の乱」の経緯です。この乱を境にして、公家と武家との力関係が逆転した歴史のターニングポイントにもなりました。上皇も天皇も再び都に戻ることもなく、流刑地で相次いで亡くなっています。隅々、三千院で出家していた皇子の尊快法親王のもとに、二人の遺骨が届けられましたが、長い間謀反人として法華堂に止め置かれました。大原御陵に葬られたのは明治期になってからの事です。悲しい歴史の秘話です。大原の里は悲劇に付きまとう処ですが、八瀬童子に守護された山里で御靈が休まる処でもあるかも知れません。

三千院前を通り、タクシーの待つ駐車場まで歩きました。これから向かうもう一つの悲劇に包まれた寂光院は、大原の里の小径を歩いて行く方が風情がありますが、大原は厳しい寒さで冷え込んでいましたので、タクシーに身を任せることにしました。

<はじめに>

日本は元来神道の国であるにも拘わらず、他国から伝來した仏教が「人の杖」として息づいています。その仏教が、どの程度日本人の暮らしに溶け込んでいるのだろうかと考えたとき、それは日常飲んでいるお茶のような存在なのではないかとよくいわれます。お茶という飲み物が、私たち日本人の暮らしの一部に定着しているように、仏教的な考え方はごく自然に我々の生活のなかに入り込んでいるということなのでしょう。そこで今回、仏教經典のなかでも日本人に人気のある『般若心経』を読むことによって“仏教の何たるか”の一端を探ってみたいと思います。

ご存じのように仏教は紀元前五世紀ごろインドで興り、ときを経て中国経由朝鮮半島から538年日本に齋されましたが、それは「大乗仏教」という仏教であって、仏教の創始者である釈迦（ブッダ）が唱えた仏教そのものではありませんでした。七、八世紀ごろ日本に入ってきたとされる『般若心経』も釈迦が直接説いた仏教ではなく、釈迦入滅から約500年経った紀元前後頃に新しく成立した大乗仏教の經典です。大乗仏教は、世のすべてのものは「空（くう）」であるという仏教教理（空を真理とする教え）を掲げて登場した仏教です。

釈迦の初期仏教は「自分の問題は、自分で解決しなさい」（自己鍛錬システム）という峻厳なものであるのに対し、大乗仏教は「超越的な救済者 や不思議な力を借りて、釈迦と同じブッダの位にまで行こう」という、ゆるやかさがベースになっています。

『般若心経』の内容は、釈迦が説いたとされる仏教の基本的な教えについて言及はされていますが、それらを悉く実体はないとして否定しており明らかにその違いがあります。しかし釈迦仏教、大乗仏教とも「人を支える杖」としての教理を持っているので、どちらを好むか、どちらを信じるかは個人の自由ですが、両仏教ともにその存在価値は歴史的に認められています。

日本の宗派の中で『般若心経』を大切に扱っているのは、密教系の天台宗、真言宗、禅宗（曹洞宗、臨濟宗、黄檗宗）などです。なお、本冊子では大乗仏教と区別するために、釈迦が直接説いたとされる仏教教理を必要に応じ初期仏教または釈迦仏教と表現しています。また文中に単に仏教と出てきたときは、両仏教をそれぞれ個別に指すのではなく、仏教一般という意味にとってください。

〔仏設摩訶（ぶっせつまか）〕

般若波羅蜜多心経（はんにやはらみつたしんぎょう） 唐三藏法師玄奘 訳
一）

「仏説」とは、釈迦（本名はゴータマ・シッダールタ）の説いた説法ということですが、俗に八万四千といわれるお経を、釈迦が実際に全部説いたとい

うことではありません。なお釈迦（「sakya」）とは、ゴータマ・シッダールタの属していた種族の名です。

では何を仏説というのか？については「世のすべての現象は縁起によって成り立っている」という考え方を外していなければ、仏説といわれています。この縁によって生起すること。つまり、この世はすべて因果関係によって成り立っているという考え方方が仏教の根本教理で、その考え方方は釈迦以前の迷信や不合理を離れ、正しい因果関係にかなった合理的な真理であるとされます。仏説とはそのような意味合いです。なお、この仏説という言葉は、現在日本で読まれている『般若心経』（注1）につけられているだけで、中国、朝鮮はもとよりサンスクリット語（注2）の原文にもないようです。

では、なぜ仏説なる言葉が付けられたのかについては龍樹（りゅーじゅ）（150—250年頃）の『大智度論』という般若経の注訳書などにあるからという説がある一方、『般若心経』が通常の仏典とは異なり「如是我聞」（注3）ではじまっておらず、あくまで釈迦が説いた教えであるということを強調するために「仏（ほとけ）が説いた」という言葉が加えられたという見方があります。

「摩訶」はサンスクリット語の「マハー・maha」からきている音写語で「摩訶」という漢字自体に意味はありません。ですからいくら摩訶という字を眺めても、そこから意味はくみ取れません。サンスクリット語の「マハー」は大きい、偉大なということで「仏説摩訶」は偉大な仏説という意味になります。「般若波羅蜜多」は二つに分かれており「般若」はサンスクリット語の「プラジュニヤー・prajna-」で智慧を意味します。「波羅蜜多」は同じく「ペーラミター・paramita-」（完成した）の音写語で、合わせて「完全なる智慧」「偉大なる智慧」の意です。また「paramita-」は「param」（彼岸に）と「ita-」（至った）と分解できることから「波羅蜜多」は、「彼岸に至った」と訳せるので、「般若波羅蜜多」は、仏の智慧の力のお陰で彼岸に至ったとも解釈されています。

彼岸とは、仏教で目指す最終的な理想の境地で、煩惱にまみれている此岸（しがん）<この世>から修行によってそれを渡り切った向こう岸、つまり涅槃（注4）の境地をいいます。『般若心経』には、この「般若波羅蜜多」という音写語が五回も出てきますが意味よりむしろ呪文としての響きを持っているように思います。なお、智慧を意味する「般若」という言葉は、直観的な智慧ということで知識や教養ではなく、ものごとを正しくとらえ判断する智慧力という意味で、論理的思惟とは根本的に異なるといわれています。

論理的思惟は、仏教では分別智（分別し分析する知恵）といい、これに対し「般若」は「無分別智」（分別を超えた智）とされ思い慮はかりを超えたところの智慧で、心を静めて一つの対象に集中し、心を散らさず乱さぬ状態（禪觀）によって得られるとされます。仏典のなかでの「般若」は、初期仏教以来、無常苦無我などの諸法の道理を見抜く智慧として、また三学（注23）の一つとして重要視されています。一方大乗仏教でいう「智慧」とは、一言でいえば実体的な考えを徹底的に否定する「空」（無執着）をいいます。

それは菩薩（注5）の修行時必須科目となっている六波羅蜜多（注6）の締めくくりに「般若波羅蜜多」として登場しています。

二)

以上で題名についての解説を終えますが、この經典については二つのことがいえます。『般若心經』は一種の詩ともいえます。したがって凝縮された当該 262 文字（除題字）の字句について多義多端な解釈がなされていること。二つ目は、『般若心經』の最後に「揭諦 揭諦～（ぎやーてい、ぎやーてい～）」という言葉が出てくるように、この經典は秘密仏教的色彩が濃厚であるということです。この最後の文字は仏の智慧をあらわし、災厄を除く力をもつとされ漢訳されていません。原語の発聲音をそのまま漢字に置き換えた当て字です。秘密仏教的とは呪を想像しますが、『般若心經』の神髄はまさに「大明呪（だいみょうじゅ）」（「マントラ・mantra」）であり、呪は「不思議な強い力」と理解できます。呪は決して悪意を持った言葉ではありません。

なお『般若心經』は古くから玄奘（げんじょう）（602～664年）訳が最も広く流布していますが、鳩摩羅什（くまらじゅう）（344～413年）などの訳を含めると合計七訳が現存しているようです。また、日本にはサンスクリット語の原本（貝葉（ばいよう））が奈良の法隆寺（小本）と長谷寺（大本）にそれぞれ保存されてきたといわれています。以下、普段聞きなれない仏教用語が出てきますが慣れれば大丈夫です。根気よく親しんでください。

三)

それでは、これから読んでいく『般若心經』という仏典について、その全体像を見ておきましょう。世界宗教である仏教は、釈迦（初期）仏教→部派仏教→大乗仏教と展開してきました。創始者の釈迦が亡くなつてから 500 年くらい経つて出現した『般若經』（注 7）の真髓を抜粋した經典が『般若心經』です。

『般若心經』は、大乗仏教の中核思想の「空」という理論（考え方）を軸とし、釈迦仏教の教理を悉く「実体の伴なつていないもの」と否定しています。しかし『般若心經』の終盤になると「般若波羅蜜多」（完全なる智慧）とは、実は呪文を唱えることであり実体を伴つたものであると説いています。終始、空（実体はない）が絶対であると強調する『般若心經』が、終極になって一転して「実体が在るものがある」という論を張っています。つまり相容れない論理を共存、併記しているのです。何故でしょうか、これは大いなる疑問です。不思議なことに、これらのことについて大乗仏教の信者たちは違和感を感じていないようですが、この矛盾点については後の項で一部考察してみました。なお部派仏教とは釈迦入滅後 100 年頃、釈迦の教理の解釈をめぐって、その伝統を守ろうとする保守的教団と進歩的な教団とに分かれた時代の仏教をいいます。

《注》

[注 1] 般若心經の「心」（「フリダヤ・hrdaya」）とは、①身体のなかの心臓・胸という意味と、②その場所に宿り働くと考えられる精神作用（知識・感情・意思の総体）を指す。故に『般若心經』は「般若」（智慧）の本質を説いた經典とされる。

〔注2〕サンスクリット語はインド亜大陸で古代～中世にかけて宗教、学術、文学等の分野で公用的役割を果たした言語。梵語ともいう。

〔注3〕如是我聞（によぜがもん）

〈もん〉とは、釈迦の弟子たちが「私は釈迦から、このように聴きました」といって覚えていることを話し、それを書き留めたことをいう。一般の仏典は「如是我聞～」ではじまるケースが多いので、『般若心経』では「仏説」と断わったと思われる。

〔注4〕涅槃（ねはん）（「ニルヴァーナ・nirvāna」）とは、仏教の求める究極の境地、悟りきった境地をいう。初期仏教では煩惱の原因といわれる貪欲（とんよく）（むさぼること）、瞋恚（しんい）（怒り憎むこと）、愚痴（ぐち）（愚かなこと）の三毒（さんどく）を完全に滅した状態を涅槃といっている。究極には輪廻の苦から脱した状態が涅槃。

一方大乗仏教では、あらゆる人々（衆生）を救うためには、自らが悟りの境地に入っているままでは救うことができない。かといって煩惱にとらわれていたのでは、なおさら救うことはできない。そこで自らは悟りの境地を体験しつつも、その世界にとどまらず、悩み多い人々の住む一般社会（生死界）にあって活動することこそ菩薩の行であるとしている。菩薩は大悲（だいひ）（いつくしみ）をもって、人々を救済するために仏教でいう涅槃には入らないとする。

〔注5〕菩薩とは、サンスクリット語の「ボディサットヴァ・bodhisattva」に相当する音写語の菩提薩埵（ぼだいさつだ）をちぢめて菩薩としたもので、悟（覚）を求める衆生をいう。菩薩には觀世音菩薩、地蔵菩薩、普賢菩薩などあり、それに対して釈迦如来、薬師如来、阿弥陀如来、大日如来などの仏（ほとけ）がある。如来は至高至純の完全な仏をいう。菩薩は位でいえば如来より一段下で、人間と如来の間の仏をいい、我々はどんなに頑張っても如来になることは出来ないが、修行して菩薩道に励めば菩薩になることはできるとされる。また菩薩は、完全なる如来が人間を救うために菩薩の姿になってわれわれのいる娑婆世界に降りてきて、苦しんでいる私たちを助けにきて下さったとも考える。菩薩という称号は、もとは釈迦の前世時代の呼称であったが、大乗仏教が興ると菩提は悟りを求める人という意味から、他の者も悟りに至らせて救おうと努める者をさしているようになった。觀世音菩薩等高い境地に達している菩薩もあり、菩薩信仰も盛んである。なお、「釈迦」も「如来」、「仏」も「ブッダ」のことであることに注意したい。

〔注6〕六波羅蜜多とは、大乗仏教において菩薩に課せられた六種類の実践徳目（必らず実行しなければならない行い）のこと、布施、持戒、忍辱（にんにく）、精進、禪定（ぜんじょう）、智慧をいう。前の五つは智慧を得るために手段とされる。忍辱は耐え忍ぶこと、禪定は静かに瞑想して真理を観察することをいう。

〔注7〕『般若經』は般若波羅蜜多經といい、大乗（mahayana・mahat=大きな、Yana=乗物）を最初に宣言した經典であり三世紀頃までには成立してい

たようだ、漢訳された般若経だけでも四十二種類あるとされる。なお『般若経』の成立以前、既に六波羅蜜多が説かれていたが、この六波羅蜜多の第六番目に置かれた「完全なる智慧」(般若波羅蜜多)というキーワードが『般若経』全体を統括したことにより、革新的な大乗の宣言に結晶したといえよう。また『般若心経』の鳩摩羅什訳が出現したときには、まだ密教の体系化は進んでいなかったといわれ『般若心経』は密教の先陣受容書ともいえる。(つづく)

文化講座・講演会

奈良興福寺文化講座 平成29年2月16日（木曜日）

午後5時半～6時半：第一講

講演：「運慶のまなざし－宗教彫刻の靈性と造形」

講師：興福寺国宝館長 金子啓明

午後6時40分～7時・・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：（学）文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

（JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分）

第79回 新三木会講演会のご案内

1. 日時・会場 2017年2月16日（木）13:00～15:00

如水会館スターホール

2. 演題・講師 『新大統領下・米国の今後の方向』

古森義久氏 国際問題評論家
産経新聞ワシントン駐在編集特別委員

3. 申込・会費 E/Mail：shinsanmokukai@gmail.com

TEL：047-464-4063

フルネーム・卒年・所属（例：一般・紹介者名）

会費：2000円 婦人1000円 学生無料

茶話会：15:15～14:20 千円（自由参加）

4. ホーム <http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

5. 予告 ● 3/16, 第80回 秦郁彦氏 現代史研究家
『昭和史の争点』（仮題）

事務局

<事務所までの道のり>

場所：〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号
(電話・FAX 番号：03-3837-0290)

御徒町界隈では、JR山手線・京浜東北線と昭和通りが南北に並行して走っています。

- ① JR御徒町駅北口を出てすぐ右に折れて、2ブロック直進すると、昭和通りに出ます。右に多慶屋の紫色のビルを見てさらに8ブロックほど直進すると、
- ② 都営大江戸線の新御徒町駅のA2入口が右側にあります。やや進むと(都営大江戸線の新御徒町駅A2入口を出た場合は右に回ると)、佐竹商店街のアーケードがあります。右折してアーケードを7ブロックほど直進すると、佐竹商店街の出口に到達します。そこを右に曲がってしばらく行くと、左側に薄青いビルがあります。(1階は焼肉屋「もとやま」。)そのビルの2階です。

<投稿歓迎><図書の推薦依頼>

<プリント版・郵送>

メール版(無料)を月に一回編集してプリント版を発行郵送しています。お申込みくださいとすれば送ります。その際には、実費として1月350円(4200円/年)をいただいておりますのでご了承ください。

<振込先> 振込先：三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532

(口座名) テンチシニアネットワーク

<配信・郵送、不要の場合はご一報ください、中止いたします。>

天地シニアネットワーク・テーブル・440号

発行：2017年1月18日

:天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号室
TEL・FAX 03-3837-0290
E-Mail tenti@mvc.biglobe.ne.jp